陸軍の道

私の昭和史

水上勉

民俗学の道

和歌の昭和史

水上勉

片陰の道

印刷日——昭和五十四年五月三十一日
発行日——昭和五十四年六月十日

著　者——水上　勉
発行者——徳間康快

発行所——株式会社　現代史出版会
東京都港区新橋三—一〇—九　第五兼坂ビル
〒105　電話四三一—二一四九

印刷所——ミツワ印刷
カバー——真生印刷
製本所——ナショナル

発　売——株式会社　徳間書店
東京都港区新橋四—一〇—一
〒105　電話四三三—六二三一
振替　東京四—四四三九二一

片陰の道 ■ 目次

子どもの頃　7
陽かげの青春　17
青春放浪　24
ある事件　——築地警察留置場　39
敗戦の日　——リヤカーを曳いて　70
「フライパンの歌」の頃　80
宇野先生と私　——枯野の人　83

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わが直訴 ——拝啓 池田総理大臣殿 110
直訴その後 ——あれから十年 127
華燭 137
もう一つの華燭 152
父子邂逅 225
私の昭和史 231
あとがき 248

裝丁　高橋忠彌

片陰の道

——私の昭和史

子どもの頃

1

生まれた家は、福井県大飯郡本郷村字岡田というところにあった。日本海辺にのぞんだ若狭湾の谷の奥である。どういうわけか、私の家だけは、人家の集まっている部落から、ややはなれた「乞食谷」という谷の口にあった。「コジキダン」と村の人はよんでいた。なぜ、そんな恥ずかしい名称で、私の家のある地籍が村人によばれていたのか、理由は今日になってもわからない。

ずいぶん、粗末な家で、藁ぶき屋根の入母屋造りではあったが、むかし、ここは、地主の林左衛門という家の木小舎であったものを、大工の父が改築して、私たち一家を住まわせたものときいた。

父は大工だったが、自分の家だけは、荒れるままにしていた。紺屋の白袴ということを後年になってきいたが、父もそういう性格の男だったのだろう。むかしは木小舎だった家だから、壁もなく、家の周囲は板囲いだった。その板も他家の普請場からもってきたもので、乾燥する間をあずかったもの

らしく、時がくるとどこかへ持ち去られた。だから釘が打ってなく、たてかけて縄でゆわえてあったことをおぼえている。冬になると、雪風が隙間から吹きぬけた。一夜じゅうふとんがしめった。私たち五人兄弟は、母に守られてこの寒い家で大きくなった。

母は、部落でも長者であった堀口文左衛門という家の次女に生まれているが、文左衛門が没落したので、京都へ女中奉公に出ていて、十九の時に、寺大工の父と恋愛して、水上家へ嫁してきたといった。乞食谷の寒い家へきた時は、淋しくて、何度か祖母の家へ逃げ帰りたかったと、のちになって私に語っている。

父は覚治といい、自分の家は荒れるままにしておいて、他所の家の普請ばかりしていたが、チョンカラコ（バクチ）が好きで、ついぞ、夜など、家にいたことがなかった。遠い普請場へ出かけた時は、二ヵ月も三ヵ月も帰ってこない日があった。母は、とんでもない男の所へ嫁にきたわけだった。しかし、いったん、心を決めて来たのだから、逃げ帰るわけにもゆかず、私たちを育てることにその生涯をかけたのである。

水上家には、母がきた時は、祖父は死亡していたが、盲目のいしという祖母がいた。この祖母は小豆のサヤで眼をついたのがもとで全盲だった。しかし、七十二歳まで生きたが、晩年は、孫の私を背中におぶって〝村あるき〟という小使いをしていた。部落に葬式が出たり、祭りがあったり、入営者があったり、嫁取りがあったりすると、いちいち、それをふれ歩くのが仕事であった。私は、全盲の祖母の手びきをつとめた。手びきといっても先を歩いてゆくのではなくて、祖母の背中にいて、道を教えたのであった。村の道は石ころが出ていた。わきを深い川が流れていて、そこで、米をといだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

り、茶碗を洗ったりするのが、部落の慣習だったが、私は、祖母がこの洗い川へ足をふみすべらさないように、気を配っていなければならなかった。わるい子供たちがいて、私を背負った祖母が、ふれごとに歩いていると、

「お婆ァ、そっちは川じゃぞ。あぶないぞ、こっちへくると牛のクソじゃ。踏むとババチイぞ……真ん中歩け」

とはやしたてたものである。私は祖母の背中で、村の子供らの嘲笑する声をきいて、口惜しかった。今日でも、私は村の人間を憎むようになっているが、これは、この少年時代の思い出が脳裡をはなれないからである。もっとも、この当時の餓鬼大将は戦死したり、病死したりして、いなくなったけれど、今日、村へ帰って年をとった五十歳前後の連中をみて、私にはなぜか馴染めないものがある。小さい頃の屈辱感が胸をつきあげるからだ。

この全盲の祖母と私が、洗い川へ落ちて溺れかけたことがあった。私が四歳の時で、祖母は、それが原因して風邪をひき、寝ついて、とうとう秋の末に死んだ。祖母は、哀れな生涯を私の眼の前で閉じた。

祖母が死ぬと〝村あるき〟の役は母にまわった。この仕事をすると、区長の家から年にいくばくかの米が貰えたからであった。

母は、村あるきをしながら、私たちを育てたが、小作田を守りするのが日課になっていた。私たちはよく、母について谷田の奥の汁田へいった。シルタという田圃は沼のように泥ぶかくて冷たかった。母はこの田圃に胸まで埋まって苗を植えた。私たちは畦のところにならんで、母の労働をみてい

た。

家へ帰っても木小舎のような家なので、風呂はなかった。だから、私たちは、母が泥だらけで上がってくる汁田のわきを流れる小川で、母といっしょに水あびしたものである。これが、私たち一家の風呂であった。秋末になると、もう谷の奥の水は手が切れるように冷たく、私たちはふるえながら足や手を洗った。母の白い軀をみたのはこの水浴の記憶以外にはない。

私は、八歳の時、京都の禅寺相国寺から小僧にくれといわれて、出家することになった。大工の父親が、何かの折に、相国寺へゆき、小僧の口を見つけてきたのであった。母は私を手放すことがつらかったらしいが、生活が苦しかったので、私を京都へ出すことに同意した。

「京へゆくとな、大勢の小僧さんがおって……勉強さえすれば、中学も大学も卒業させてもらえる……一生懸命勉強して、えらい坊さんになってけれ」

と母は私にいった。私は、母にそういわれると反対するわけにゆかなかった。「うん」とうなずいて、出家する決心をつけたのであった。

九歳の二月十八日のことであった。雪の降る一日、私は、寺から迎えにきた背丈のたかい和尚さんにつれられて、住みなれた若狭の村を出ている。駅まで、母は蓑を着て送ってくれたが、この時の母のかなしい表情は生涯忘れられない像となった。

「つとむ、寺へいったら、和尚のいうことをようきいて、修行するんやど……かなしいことがあっても、村へもどるんやないぞ……お父っつぁんのような阿呆な男のことは忘れて……えらい坊さんになるんじゃぞ」と母は別れしなに云った。

2

京都の寺は臨済宗で相国寺といった。京都五山の一つで由緒もある。本山をめぐって塔頭十二寺院があり烏丸今出川の西に広大な寺領をもっていて、枝ぶりのいい松が幾本も植わっている中に、古い法堂や方丈、庫裡、東門道場などの大きな甍がそびえていた。私のつとめたのは塔頭の瑞春院という寺で、和尚さまの名を小盛松庵といった。この和尚さまには、若い奥さまがいた。そうして私が入山した翌々月に子が生まれた。良子さんと赤ちゃんの名がついた。私は十二歳まで、この良子ちゃんのお守りをしたり小僧の修行をして、瑞春院で暮らすことになるのだが、いわば、今日、私が禅宗寺院に対して抱くようになった殆んど絶望に近い不信感も、この時代に培われたといわねばならない。和尚さまは、私に経を教え、作務を教え、子守りを教え、飯焚きを教え、掃除を教えたが、どれ一つとして、私は、心から喜んでしたものはなかった。

禅宗の坊さんというものは、墨染の衣をきて、一汁一菜に舌つづみを打ち、米がなくなると托鉢をして歩いたものである。「無欲」「無我」を教える境地にあるべき僧侶のはずであった。したがって、妻帯はゆるされず、一山の僧侶は、枯淡の庭と伽藍を守って、禅家の法燈を檀信徒に教え、自から無我無欲知足の徒であらねばならないはずなのに、私の和尚さまは、世間にかくれて、庫裡の奥に、若い奥さまを匿し、子も育て、偽りの生活をしていた。しかも、小僧である私に、おむつ洗いや、飯焚きをさせて、自分は、毎日のように、若い奥さまと芝居をみたり、映画をみたりして暮らしていた。このような禅坊主は、いわば生臭坊主であろう。

とても雲水になる卵の私が師と仰ぐ人ではなかったわけである。子供心にわたしは、和尚さまに反感をもち、日夜、故郷の母のことばかり思いながら泣いていた。十二歳までの瑞春院での四年間は、私にとっては、母恋いの日々であったといわねばならない。

私はしかし、この寺で得度式を終え、相国寺の系図にものる沙弥職として入門した。十一歳の時であった。沙弥職になったのだから衣も着、檀家へお経もよみにゆかねばならない。私は京都の町々を「小さい小僧さん」と指をさされながら歩いた。それがとてもはずかしかったことをおぼえている。檀家は、市中に数十軒はあったが、私のお経をよみにゆく檀家は貧しい家が多く、西陣の下請機屋だとか、その日暮らしの労務者の家だった。上流の家へは和尚さまがつとめた。貧しい家は小僧の私が代役をつとめたものである。貧しい家はお布施が少なかったせいでもあろうか。そういえば、和尚さまは、上流の家の葬式には、紫衣の上に金襴の袈裟をかけたが、貧しい家の場合は黒衣に青の袈裟ですました。葬式にも段階があって、お布施の額によって衣の色も変わった。

このような禅宗のいわば葬式仏教に堕落した姿は、私がのちに、宗門立の般若林へ入学するようになってわかったことである。学校の本によると、禅宗の僧侶は、もっともきびしい修行を積んで、悟りをひらいた人のするものだと書かれてあった。だから、私は、瑞春院の和尚さまに絶望したのである。十二歳になって飛び出し、放浪することになるのである。

今でも思うのだが、あの和尚さまが暖かくてもっとやさしい人であったら、私は、今日、僧籍に身を置いていたかもしれない。幸か不幸か、私はそのような和尚さまに育てられた因縁によって、永久に仏門にもどる意志を失った。いわば十二歳からの私の人生は、破戒僧の人生といえるかもしれな

い。相国寺を出てから、私は、衣笠山の等持院に拾われて、ふたたびそこで僧侶の生活を送ったけれど、相国寺を脱走破門されたという経歴がいつまでもつきまとった。それが新しい門出の邪魔をしてゆくわけである。十八歳で、私はこの等持院をまた破門されている。まったく反逆の子であった。

3

京都で育った禅寺での生活を、私は縷々として述べてきたが、この九歳から十八歳までの私の小僧生活は、今日の精神形成に大きな役割りを果たしているといわねばならない。私にかりに忍従心があり、反撥心があり、放浪癖があるとしたら、すべては、この時代に培われたものである。

禅宗の言葉に、「一日成さざれば一日喰わず」というのがある。これは支那の高僧の百丈禅師の言葉だが、瑞春院の和尚はよく私が作務をさぼっていると、この言葉を教えた。一日仕事をしなければ、一日喰わない心構えでいなければならないと諭したわけだが、私はなぜか、これに激しい反撥を感じた。というのは、それを私に教える和尚様は、のんべんだらりとした生活をつづけていて、私にだけそれを課したからである。私は、若い奥様をつれて芝居見物や、映画ばかりみて暮らしている和尚の生活を覗いていたので、和尚にこそ、「一日成さざれば一日喰わず」の言葉が必要なのだと思った。

いまでも思いだすのだが、私が京都へ出た年の翌年は御大典といって、天皇即位式の三年後にあたり、京都の町は、どういうわけか、三年後のその年も「えらいやっちゃほい、えらいやっちゃほい」と、仮装行列が町中をとおって、人通りのはげしい四条や八坂の石段下のあたりは大変な祭り騒ぎであった。この祭りに、私は和尚夫妻のあとに尾いて、奥さまの産まれたばかりの赤ん坊を背負って歩

いたことをおぼえている。人びとは顔に白粉をぬりたくり、仮装をして、踊りくるっていた。どうしてそんなに陽気に踊りくるうのか、わたしには理由がわからなかった。私は、にぎやかな通りを、赤ん坊を背負わされて、てくてく歩いた。

そんな時にも、私は若狭の母を瞼にえがいていた。早くこんな子守りのような小僧生活から逃げて、苦労をしている母親を助けられるような生活に入りたい……という欲求が私の胸に芽生えていた。私の母は、一日働かないと喰えない、哀れな小作百姓だった。京都の町では、にぎやかな御大典の行事が行われているのも知らずに、母は毎日、夜分まで泥につかる田植えに働いているかと思うと、私は眼頭がくもった。百丈禅師という和尚さまは、私の母などを眺められたら、どう思われたろう。やはり「一日成さざれば一日喰わず」と仰有(おっしゃ)ったろうか。私は子供心に、一日働かざれば一日喰えない母を、せめて一日でも休ませてやりたかった日々を思い出す。

禅宗の修行というものが、欲を捨て物を捨てる修行であるとしたら、私など、母に対する執着から、もっともその資格がなかったといわねばなるまいが、若い奥さまをもらって、赤ちゃんをかわいがっている和尚さまなども、さしずめ、禅宗和尚の資格がなかったといわねばなるまい。子供心に、瑞春院の和尚様を憎んだのはそのためである。自分のことは、棚にあげて、小僧にばかり、修行を課した和尚の云うことなど聞けたものではなかった。私が瑞春院を脱出した理由はそこにあったといわねばなるまい。

のち、衣笠山の等持院に拾われて、私は、大勢の小僧の中にまじってくらすようになったが、瑞春院の場合は、つらくても一人であったからよかったけれど、等持院の場合は集団生活の惨酷さを味わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com